

終止形承接のナリについて : その中世・近世における把握

佐田, 智明

<https://doi.org/10.15017/12147>

出版情報 : 語文研究. 37, pp.67-75, 1974-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

終止形承接のナリについて

— その中世・近世における把握 —

佐 田 智 明

われわれが特定の語の意味・機能を簡潔なことばによって規定することは、いつも容易であるに限らない。まして体系的研究の進んでいなかった中世近世の歌人にとっては、なおさらであつたらう。彼らの使う古語・歌語が特定の語句におきかえられるときも、それが、今日いうような厳密な対応を示していない、単なる思いつきより出ずる類義語・類義表現であつて、そうすることによって、当該語の意味を範疇的に設定するものにならなかつた面のあることは、もっと注目されてよいことである。本稿では、以上の見地に立って終止形承接のナリの意味用法について、その把握のしかたを辿つて見ようとする次第である。

伝聞推定のナリと云われるもの、すなわち終止形承接のナリについては、これまでに多くの学説があつて、まだ明確な帰趨を得ていない状態にあるが、これら先学の諸説の中で、しばしばとりあげられるのが近中世の歌人歌学者の説である。しかし

で、それら中近世の説の意味するところについては、それほど留意せられず、表面的記述のみに注目することがなかつたとは云えないようである。そこで本稿では、先学の引かれた先人の諸説に、新たに見出し得た説を加えて、その背景を考へてみたいと思ふ。

ナリが口語として充分活躍したのは上代、ないしは中古までで、中世以後は文章語・歌語としてののみ使用されるに至つたことは既に論じられている。その事由については、中古に始まるころの連体ナリの発達（注）、それに伴う同語形衝突を避けるために、類義的存在であるメリなどに交替していったことをあげておきたい。ともあれ中世初期においては、「鳴くなり」、「言ふなり」など慣用的用法が目立ち、中には連体ナリと混同された用法を生じるに至つて（注）いる。すなわち中世においてナリは古語であつたのであつて、ここにおいてナリについての反省、意識的解明が始まるのである。

このうち鎌倉期までのものには、ナリについて相当精緻な言及が見える。前稿にふれた八雲御抄における「らし」と「なり」

の類義性の指摘^註、東塔東谷歌合における聴覚的前提についての把握などがあり、その他では、教長註古今集における「アレニナク」の言いかえ、平家の「信濃にあんなる木曾路川」(大系、一四二七ペ)がある。ラシとナリを類義語としたことは、ナリを推定をあらわす語群の一つと見なしたことを示すが、同時に、本来ならそれぞれ充分に対立すべき意味領域を持っていた筈の語が「同じ事」と目される点、それ自体、両語が口語性を失いつつあったことを考えさせるわけである。ただし、このように意識的に特定の語をとりあげる場合、すなわちラシ・ナリの如きは、確かに「同じ事の詞」かわりたるものと意識されるが、実際の把握のしかたではかならずしもその通りではなかったことは、ここに示した他の例を見れば明らかである。しかし中世も後期に至ると微妙な変化があらわれてくるのである。

二

一 擗衣の題に結句なとにうつ衣哉といふは人の打を云也。衣うつ也といふは我うつ也。

(時秀卿聞書・統群書類従十七上・一六ページ^註)

中古和歌を念頭にして云えば、「衣うつなり」は終止ナリの場合であると考えられる。右の例はむしろ連体ナリとしたものようであって、中古和歌の例にすれば右の説は逆になるべき所である。またラムの構文と対応するナリ止めの歌、

しら山に年降る雪や積るらん夜半にかたしく袂さゆなり
について、次の説(Ⅱ歌)がある。

白山には毎年の雪が積れば又今年の雪のつもるげな ことの

ふこよひは袖かさえたよ(新古今私抄・未刊国文古註歌大系・九七ペ)という訳文はナリの把握の基本的な姿として考えられる。ナリはいわゆる詠歌の形式であらわされ、「げな」で終る推定表現の根拠となっている。古今集三一九「ふる雪はかつぞ消ぬらしあしひきの山のたぎつせ音まさるなり」について、榮雅抄では次のように解説する。

降りつもりし雪はかつくきえぬらん 山の瀧つせ音まさりてきこゆると也、

右の文の「きこゆる」までが解説文である。「聞ゆる」に対する原歌は「(音まさる)ナリ」である。同様な例では

まどろまでながむる月の明方にね覚やすらむ衣うつなり
夜もすがらねもせてみる月に衣うつ音もせさりしを只今うつ
音の聞えたるはたかね覚してうつ衣そと也

(拾遺愚草抄出聞書・未刊国文古註歌大系・二九ペ)

とあり、只今という語が加えられている。前述新古今私抄にも「こよひは云々」と云っている。伊勢物語の宗長聞書で「わがうへにつゆぞおくなる」の歌について(五九段)

たゞ今いき出たるころにて、大かたの露にてはあらじ、
天の川などわたる舟のかひの雲にてもや侍ると云心也。此露
をきいに思ふさま也。

(片桐洋一「伊勢物語の研究・資料篇」による・六八三ペ)

の例では、ナリによって表現されることながら「眼前の体」としてとらえられる。また古今二一〇「春霞かすみいでにしかりかねは今ぞなくなる秋霧の上に」において、榮雅抄に、

はるかすみにたち別れていにし名残ありつる鷹がねは今そ

秋霧のうへに鳴わたると也、眼前の体をよめり。

とあるのも同断であろう。もっともこの歌句にはそれらしい辞句があるので傍例にしかならない。なお季吟の八代集抄の釈文は右歌をそのまま引いている。

次いで釈文の傾向として、ナリを含む歌で「きい」に思

「おどろきて(いふ)」^まなどが見えることで、新古今私抄で述べたと同じ詠歎のニュアンスが記述されていること

第三には、ナリ止の構文が、条件法としてとらえられていることである。百人一首宗祇抄で「世をうち山と人はいふなり」(古今九八三)について、

宇治山といへともわれは住得たるやうの心なり古今にし、うたしかならずといへるは、よをうち山と人はいへともとあるへき歌を人はいふなりといへるところをさしていふなり

(笠間書院影印本による)

栄雅抄や聞書全集(歌学大系六・一六六)に同趣の本文がある。ナリの解釈の一傾向であろう。さらには、ナリの部分が、拾遺愚草抄出聞書の例のように、「聞えたるは云々」と「な」たりする。ナリ構文がラム・ラシなどと対応する歌では、ナリ止の部分は「ハ」「ナレバ」などの形をとっている。

以上が中世後期のナリ把握の様態である。わずかな例であるが、注釈文におけるナリは、「眼前の体」を、一種の感情をもつてとらえる傾向が感じられる。その中で、聴覚的な把握がいくらか見える。とりあげたものの中でナリ止の歌が多かったこともあるが、これらのとらえかたは後世においても共通すると

ころがある。

なお、既に注目されているようにナリとメリとを比較し、とくに対照して述べた例がある。

める・めりなとはなりといふ詞の心なり。

(無言抄・中・古典全集八〇六)

めり、なりのかはり也(匠材集・四・古典全集二五六)

このナリがどのようなものであるか、近世期のものと比べてゆきたい。

三

宣長、成章以前のナリの把握は、おおむね中世後期と変わっていないようである。

人はいふなりと云がわれがいふ也といひたるも同じ詞也

(百人一首難談・茂庵全集三三四)

連体ナリであれば別だが、終止ナリならば右の説は出て来ない。三冊子に、

其角が「たびうりにあふうつの山」といふも逢はんといふ所を逢ふといふ句也。喜撰「人はいふなり」の類成るべし。

(古典大系による、四〇六)

という例、「らむ」「む」という所を「なり」と云ったと考えれば、「なり」は今云う連体「なり」となる。またナリを単なる添えた辞とみることもあり得よう。

宣長の草庵集玉篋所引の諺解に

ことわりをうくなる神にみそぎしてうきをいとふと何かこつらん

うくなるは請るなる也、道理を以てさへ折れば神は正直の頭によどるとよくうくる物也。(筑摩版宣長全集・三九九頁)

右は終止ナリを連体ナリで置換えている。宣長はこの点については何も云っていない。右のほか、ナリを提示して解説する例は多い。(引用中へ)内は筆者補説以下同じ。

1 いふめる、言ふ也。めるは休め詞也。……いふめれば、言ふなればの心也

(和歌八重垣、四ノ一〇ウ)

2 現在の手尔葉同詞。なり・なる・めり・める・けり・ける

(一步・上・四四〇)

3 行くめる・帰るめり・渡るめり……いつれもなりといふてにをはの心也(同上・三三〇)

4 なりといへる語末の助辞三種あり。「終止・連体ナリを含む歌例あり、略す」此十首の如きは也は已辞又語辞など注せし也字の義に相似たり。「このあとニアリのナリ、ナリケリの類の二種類をあげて説明。略す」(古今集和歌助辞分類・上・三七)

5 めりはなり、に似て少し疑の心をかねたるやうの事なりと不昧真院殿御説也。める・めればなる・なれなどに同じ。但し疑の心あり。(あひきつな・下・四二)

これらの説で、「めり」に対比されている「なり」が終止ナリであるかどうかも疑問である。たとえば「めり」の「め」を休め字であるという説が春樹頭秘抄三十三に見えるし、延約説で知られる真淵も「ゆくめる」は「ゆける」の延語であるとしている。(舟本願抄言釈・旧版真淵全集・三九八〇頁) 真淵はまた、「事なめり」は「事にありけり」の約で「にあ反な」「りけ反め」

だと述べたあと、

解に少しうたがふ言といふは違へり。いひ定むることばにこそあれ。(舟本願抄言釈・同・三九七六頁)

休め字や反切云々自体は古語と訳語との関係を示す手段のみであるから問題にはしない。問題は、ゆくめる―ゆける、事なめり―事にありけりという両項それぞれにおける関係である。「めり」が「り」「けり」あるいは単なる詞の助けとして意識される(八重垣、四)ことがある以上、「めり」と対比されるナリが終止ナリであったとは云えないわけである。

まして終止ナリは文章語、歌語であったのであり、耳遠い語であったナリが解説文に登場する可能性は少い。さらにいえば、終止ナリがいわゆる推定であれば、少くともメリ程度に「少し疑ふ」という記述が見えてくる筈である。もっとも終止ナリに対する把握は、真淵においてすら、宣長・成章に近い精度をもってとらえたことは確かであって、左の例などはもっとも著るしい。

みよし野の山の秋風さよふけてふるさとさむくころもうつなり
搦衣の意を、いとどしき吉野山の秋風のさよ更て夜寒なる

に此古里に衣うつ声の哀なるべきさまを思ひていへり。

(宇比麻茶備下・旧版三四二八頁)

前後するが、契沖においても同様な事象が指摘できる。

陸奥にありといふなる名取河なき名とりては苦しかりけり。

(古今、六二八)

名取川といふ川の陸奥にあんなると人のかたるをいつしかま

ことなき名を取てはいとくるしきとなり。(余材、旧版全集四二) 那久那留登理加一啼尔在鳥哉ナリ。(厚類抄・同・六〇べ) 柯榕播儂俱儂梨一雞者啼也ナリ(同・四八べ)

あとの例は、

者てへり…は決する言なれば何々にありといふ所に置きおのづから叶ふ故に世になりとよむ字なりと思へり

(和字正蓋抄・國語学大系・二八七べ)

その他の例によって断定辞と意識した用字であると考えてよいと思う。(あとに述べる)。

さて、古今の例は逐語訳として適当な例ではないが、少くとも記紀の例と対比するには充分であろう。

なお類聚名物考(明治活字版による)に、

○そへていふなり、添云也 ●このナリは上をことわるにはあらでかろくたゝそへていふなり ○くれ行は浅茅か原の虫の音も尾の上のしかのこゑたてつなり。(六ノ三三八べ)

○なる (二種のうち一つはニアルのナル(在)とし、もう一つに) たゞナというべきを延べてなるという詞有り。岸によすなるといふが如きは只岸に寄るといふを奈文字をそへて

助語となせるなり。是は在の意にあらず。(六ノ三三七べ) ○すなる ●するなるの略語なり(六ノ三五一べ)

という例がある。同書では指定・存在のナリ以外に、添えて云う、助語のナリを認めている。ここでは終止ナリの意味・機能の説明が不可能であった。しかも「すなる」においては混同の明確な例を示している。なお文中のナルは文終止のナリとは別にしてしようとする意識があったことが考えられる。

以上近世宣長以前では、終止ナリ・連体ナリの混同の傾向が見えるが、なお一方では文脈に即しては連体ナリとの識別は行なわれていたであろう。その方向は、中世後期と同じであった、それが宣長らの説へ投影していったものと考えられる。

四

宣長になると、活用形の認識の成立に伴って、終止ナリと連体ナリの区別意識があらわれてくる。承接形の相違が二つのナリの存在を前提とし、さらにその区別へと導く。玉の緒と遠鏡と、そのナリに対する記述の変化は以上のことを示すものであるが、この次第は武田孝氏の御論考に詳しい。記伝、九で、このナリは「見聞物の上を他より言時に添ふる辞」(筑摩版全集九ノ三九四べ)とする。遠鏡例言では「あなたなる事をこなたより見聞きて云ふ詞」(同三ノ一一べ)とする。多く指摘されているように、ここにことから言語主体との分離の意識が存在する。

これは、直ちに推定・伝聞などのニュアンスを生む契機をもつが、一方では、その「事態」に対する主体の情意をも派生する性格のものである。ただし、宣長の場合は「あなたなる事」と「こなた」とは交錯することはない。したがって「我が上」のことについて「——ナリ」ということはあり得ない。これは成章の云うメリに近いものがある。

宣長に従って考えてゆけば、ナリを含むセンテンスの構成する場面は、推定のもつ場面に近い。類似の形として「おしはかる」がある。もっとも宣長はナリを「おしはかる」とは云わない。が、推定へ転ずべき契機を多く含んでいるといえる。

宣長にやや先んじて成章は、独自の立場からナリを説く。結果的には宣長の先蹤と云つてよい程類似している。今は先学の説に譲つて省略するが、ただ次の点はとりあげておきたい。すなわち、成章によれば、ナリは「近く見聞く事を定かによむ言葉」（刊本あゆひ抄、五、何めり）であり、「直々見聞する事を言ふ故に近く身の上をもいふ」（稿本 めり類・成章全集上四〇一）のである。この近く、直々、がとりあげられるのは、前述中近世人の把握のあとを受け継いでいるわけである。

さらに云えば「——ナリ」の場面で、「あなたなるさま」と「こなた」が対比するが、その関係は推定や伝聞を生むような関係であるより、むしろ自・他が同一場面に共存するとき関係にある。そこで「只今我みづからなす事を除きて、よそにかたどりなす」（稿本・也類・成章全集四三九）ような表現作用も生じる。これは表現の手段としてあらわれる技法であつて、対象の認識のしかたではないと見られる。

ともあれ成章にあつては、「なりもじ」を含むメリ・ナリが有倫と別に定立されているのであり、この事が意味範疇のちがいを認めたと考えられるとすれば、問題の終止ナリは連体ナリと異つたナリである筈で、（したがつてニアリではない）、しかも将倫のムヤラシと対立しメリと一面共通する語としたには違ひないのである。

御杖は成章の考えかたを一步はみださせて次のように云う。すなわち、ナリは「向ふのさまをながむる詞」であり、「こなたの事に持ちあはぬ事の手とどかぬかなたにあるさまを思はずる詞」であるとする（俳諧天尔波抄、六一ハウ）。そして、たとえ

ば百人一首喜撰の歌を「その世をうしといふ人の心の置所、われとはたがへる事をおもひくらべさせていはれたるものなり」とし、中世以来の解釈をふまえて論じている。注釈では次のように述べている例がある。

音為奈利とは御かりに出給はむとて御弦打し給ふが後宮へきこゆる也。奈利はすべて耳に立ち、目にしたつ事をいふ脚結にて、その耳目にたつはそれにつけてふかく心にあたる事をしめす也。（万葉集燈、卷一・三番歌）

また、土佐日記燈、一で、「男もすなる」についてすなるを拾本定本すといふとあり、すといふといふはさるよしを聞たる心なり、すなるはかたはらより見およへる心なり。

としてゐる。万葉の歌は「ながむ」に転じて考えた場合で、土佐の例は「よそにかたどりなす」の変形である。

この考えかたは、後続の研究者の上には、むしろ「ながめ」として、御杖の万葉燈の方向から受容されて云つたようである。しかもそのような素地は充分に用意せられていたものである。

五

成章・宣長以後の説をいくつかに分類してみよう。まず、「めりはなりに同じ」（玉あられ窓の小篠（前編中巻29ウ）所引百人一首改観抄本居翁書入）の見地から、メリ・ナリを比較したものがある。

是らはみな目のまへに見ること聞く事有る事思ふ事ともにて

なりといふに同じ(玉あられ窓の小篋、同・三二ウ) あるいは

紅葉みだれて流るめりも目前に見たるけしきなれば雅望か
りの意といへるよろしげなり (同・三二オ) また、

めりはなりてふことをあやぶみいふが如き心の辞也(ことだま
のしるべ、大系二四八)

めり・める・めれ ト思ハレル 是ハ今ある事のうへをあやぶみ
思ふよしをいへる辞にて、なりにもならんにもべしにも通て
聞ゆれど意異なり(義言「末分補」下・二七オ)

これらのナリは終止ナリであると思われるが、少くとも宣長の
ナリと同一ではない。

次いで、ニアリのナリと、也字オのナリとを区別しようとする
説がある。

なり・なる・なれ 是はニより有を受て活く格にて上の也と
は異なり(末分補・下三三オ)

なり・なる・なれ 也ノ字ノ意(同・二六ウ)
広足の玉の緒補遺五にも「也の字の意のなり」として説くとこ
ろがある。これらは承接形のちがいを念頭にした説である。

この承接形によってナリを区別しようとする意識はすでに義
門の活語雑話、二(「義門研究資料集成」一九九〇ペ)、守部の助辞本
義一覧(守部全集・十二・六〇ペ)などにもすでに見られるが、研究
者によってニュアンスにちがいがあ

義門は、連体ナリを「其上に言へることを解釈する心ばへあ
り」とし、終止ナリを「然なむ・斯なむと物にまれ事にまれ指

示する心ばへなり」(活語雑話、二・一九九〇ペ)といい、「こゑす
なりといふときは、あれ〜といふきみあり、声がするわあれ
〜也」(活語指南・四八二ペ)という。後の例は遠鏡によつたも
のである。が、必ずしもその真意を伝えていない。「玉の緒繰
分」に 終止ナリはニアリの約ではないし、連体ナリと「小異
ある歟」という(同・一八七四ペ)が、独自の考察は見られないよ
うである。

守部は連体ナリと終止ナリを区別はするが、終止ナリは里言
ヂヤをあてている。義門の区別の説も遠鏡によらなければ当然
ヂヤになつたであらうか。

鹿持雅澄の「古言訳通」(秋・五十六ウ)には「音すなり」
(万葉・三番)について、ニアリのナリとし、「音するであり」
すなわち「音ガスルヂヤ」とした。言奈利・鳴奈利もそれぞれ

「イフヂヤ、ナクヂヤ」であるから、連体ナリとの区別はしな
かつたようである。その説に燈の「目に立つ」云々のことばが
でてる。

広蔭の「古今集直伝解」にも、古今二〇二の「人まつ虫の声
すなり」について万葉集燈のナリの説と同じ説があること、松
田武夫氏の新釈に引かれている。詞の玉櫛トビシの「詞辞結俗訳図」
の部分には 終止ナリに「アレ糸」 連体ナリに「ニテアル、
ヂヤ」があるから、ともどもに考えねばならない。

以上多少の差が見られるが、終止ナリと連体ナリの対比は、
一応存在するものの、意味上の区別はあいまいで、終止ナリに
指示しない断定(詠歎の意を含む)の意をとらえようとする傾
向が強い。これは、宣長や成章が考えた「あなた」と「こなた

」の対比をあいまいな形で受けついでものということもできるが、そうした背景には両形がともにナリであることから来るところが大きいと思われる。

六

以上終止ナリにかなする把握のあとを眺めてくると、宣長成章の説が突然あらわれたかに見えるが、それなりに出自の理由が考えられると思う。

中古らしいナリは伝聞あるいは推定等の場面に用いられ、中世以後は内容にやや変化があるようであるが、断定辞として、または詠歎としてのニュアンスを強く持つてくる。これにはナリが文末に用いられるという事実が関与している。にもかかわらず、逐語訳ないし、現実の把握しかたでは「聞ゆる」「音がする」となってくるのであって傍観的姿勢が強く出てくる。これらの反省が成章らの立論の契機として考えられようし、その上に中世らしいの自他の説を加味していることも考えねばならないと思う。

以上、中世らしいの諸説をとりあげ終止ナリの扱いかたを考察して来た。見出した用例が多くない点に不安があるが、一応の見通しはつけ得たと思う。終止ナリが古語化する中で把握のしかたがどのように変化して来たか、それはまた各時代の終止ナリの解釈にも影響する事である。今後大方の御叱正を得てこの方面の研究を進めたいと思っている。

注

- (1) 上代と中古のナリには用法上の差があること、ナリとメリとの対比から、その間の交渉について論述がなされた(春日和男「存在詞の研究」四二六一—四四七頁、その他)
- (2) 田島光平「連体形承接の「なり」について」(国語学56)など参照。
- (3) 松尾捨次郎「国語法論攷」七四五—七五二頁以下。福島邦道「謡曲の文法」(日本文法講座4・二五八頁)その他ふれられている。
- (4) 以下「中世歌字書に見える言語意識の性格」(語文研究67合併号)二九・三二—三三頁参照。
- (5) 教長註古今集(古典全集「古今集」附載)にクベキホド、キスギヌレヤマチワビテナクナルコエノ人ヲトヨムルホト、ギスノ、キタルベキホドスキチ、アレニナクコエハ、ヒトラノシラヌ、トヨメルナリ。(五一—五二頁)
- (6) 佐伯梅友「国語史要」、一五〇—一五一頁。古典大系補注巻六・一〇。伝聞推定のナリを実証する好例だとされる。
- (7) 同書にはまた次の説がある。
「なく千鳥かなといふと千鳥なくと云はかはる世」(同二二—二三頁) 詳細は明らかでない。
- (8) 古今、一四〇歌について榮雅抄で「ほととぎすの今鳴におどろきて」と云っている。
- (9) 用例中、助辞分類以外は富士谷成章全集上にあげられている。その他、助辞分類上三七丁に「鳴くなる」のなるを句調の助辞とする。また安永八年の「手尔於業見聞私録」に「なる、といふ事を、ふといふ事」として、「哀てふことをあまたにやらじとや春にをくれて独咲らん」の歌をあげる。(25頁) この程度の解説が一般に存したことを考うべきである。
- (10) 「本居宣長と終止形接続の助動詞「なり」(上)(下)」(「解釈」・昭四五・8及10号)
- (11) 本文のような考えかたは既に先学の説がある。たとえば佐治圭三氏「素材の世界と表現と」(国語国文、昭41・5)など示唆に富む御説がある。ただ詠歎のみが表現でないかと思う。

02 「美濃の家」と一」筑摩版全集(三三〇ペ)に見える。成章全集上、九六六ペに竹岡正夫氏がとりあげて批判されている。

03 竹岡正夫氏の諸論考、たとえば「助動詞ナリの表わすもの」(国語学25)、富士谷成章全集上九六七―九六九ページほか。その他諸氏の論考は略する。

04 「玉籠窓の小篔」、明治二〇年翻刻版による。なお「存在詞の研究」四二六―四二七八参照。

05 富士谷成章全集下研究篇・学説一―四五ペ以下参照。記伝、九(本文前出)の個

所で、宣長は従来のナリの説がこの点に注目しなかった事を述べている。

追記―成稿後、山口明穂氏の「中世語における思考と表現」(国語と国文学昭49・4)という御論考に接し得た。本稿第二節の一部に重複するところが出たが、いまは改めないでそのままにした。